

ペリリュー島から生還「やらなかったら、やられていた」

松坂桃李さんは考える 「玉砕の島」にいたら 自分も撃つだろうか

継ぐ記憶

私たちに戦争を教えてください

①

71年前、旧日本軍が米軍と死闘を繰り広げた南洋パラオ・ペリリュー島。この戦いから奇跡的に生還した福岡県筑後市の土田喜代一さん(95)とともに5月末、この島を訪れた。



土田喜代一さん

「どこも想像以上に生々しくて。戦争は歴史じゃないぞってことを学んだ」。俳優の松坂桃李さん(26)はうなずきながら振り返る。

日本兵が潜伏した洞窟には排便に使われたとみられる容器がごろがり、旧司令部の建物跡には無数の弾痕が残っていた。

した土田さんが水平線から押し寄せる米国の大艦隊を目にした話を聞いた。松坂さんがその時の心境を尋ねると、土田さんはこう答えたという。「99・9%、勝てないと思ったねえ」

それでも旧日本軍は戦い、玉砕した。

記者(30)も2月と4月、

パラオを訪ね、現地入りしていた土田さんや地元の人から悲惨な戦いについて取材した。松坂さんに尋ねた。

「同世代と戦争について話し合うことはありますか。私はないです」。松坂さんも「ないですねえ」。

これまで戦争は「教科書で習った歴史の一ページ」。それが、かつての戦場に立

ち、土田さんの体験を聞いて、「70年前の出来事との距離がすごく縮まって、本当に怖くなった。戦争は人の命の重さを簡単に変えてしまう。感覚を狂わせてしまうんだと」。

今は穏やかな土田さんが当時は、どれだけ撃ったかわからないほど引き金を引き続けたというのだ。

松坂さんは思い切つて尋ねた。「殺してやりたい、憎いという気持ちはあったのですか」。土田さんの答えは、「やらなかったら、やられていた」。

松坂さんはこの夏公開の

なかだ・あやこ 1984年生まれ。2007年入社、松山、千葉両総局を経て12年から東京社会部。今年4月の天皇、皇后両陛下のパラオ訪問に同行取材。2月にも現地でかつての激戦について取材した。



松坂桃李さん＝山本和生撮影



ペリリュー島＝4月

記者は4月、土田さんから「勝っても負けてもダメ

日本の南3千kmの太平洋に浮かぶパラオ諸島は、第1次世界大戦後から太平洋戦争敗戦までの約30年間、日本が統治。ペリリュー島では1944年9月から約2カ月間、旧日本軍と米軍が死闘を繰り広げ、日本側約1万人が戦死した。

パラオの戦闘

戦後70年。戦争体験者の肉声を聞ける時間はもう長く残されていない。節目の今夏、戦争を知らない若い世代の俳優5人がそれぞれ体験者に会い、戦争の記憶を継いでいくドキュメンタリーが8月15日夜、フジテレビ系で放送される。「私たちに戦争を教えてください」。彼らは何を感じ、何を学ぶのか。同じ体験者やテーマを取材した経験がある5人の記者が聞いた。



デジタル版に動画